

高句麗好太王碑文をめぐる

下川逸雄

朝鮮半島の鴨綠江北岸に現存する高句麗好太王碑文に
 百済新羅旧是属民 由来朝貢 而倭以辛卯年来渡海 破百
 残□□□羅一以為臣民一
 という有名な部分がある。

この辛卯年は西暦三九一年をさし、これによって四世紀末には
 大和朝廷が朝鮮半島に出兵し、高句麗の属国であった百済・新羅
 をうち破って日本の属国とし、南朝鮮を支配したのだといわれて
 きた。

在日朝鮮考古学者李進熙氏は、一九七二年五月『思想』五七五
 号に「高句麗好太王碑文の謎」という論文を発表され、現在我々
 の知る好太王碑文は要所において碑文の原文を削り取り石灰で
 新たな文字を造り上げたもので、その犯人を酒匂大尉だと断じた。
 その事実を知らずにその後、数々の拓本がとられ日本の学者たち
 は虚構された行文を盲信して、四世紀に天皇家がすでに朝鮮半島
 に進出をしていた証拠として使ってきたというものである。

この問題は佐伯有清氏の『研究史 広開土王碑』（吉川弘文館
 発行）に扱ってあるので、諸学者の意見はそれを参照していただ
 きたいが、ここでは古田武彦氏の『失われた九州王朝』（角川文

庫）の文章を抜き書きしながら李説に対する古田氏の説を紹介す
 る。

李氏はすりかえられた文字、書きこまれた文字として、全部で
 二十五ヶ所掲げられるが、その一部を示すと次の通りである。

〔原形〕 〔改造文字〕

① 履龍 → 黄龍

② □□□□ → 来渡海破

③ □□卯年 → 来卯年

④ 大軍 → 水軍

⑤ 討□残国 → 討利残国

しかし、これを見て誰でも疑問に思うだろう。これらはいずれ
 も直接イデオロギー的な問題をふくんでいないし、「日本軍国主
 義」の立場から特に有利と思えない。かりに酒匂大尉が造字した
 としても、日本軍国主義は一体、何の利益をうけるのだろうか
 と古田氏は大きな疑問を投げかけられた。

さらに、今までも現地におもむき苦心して実際にこの石碑を調
 査した人々がある。ところが、誰一人として李氏のような「酒匂
 改削の事実」を発見しえなかった。ことに問題の「倭以辛卯年来

渡海破……」の一節については、当然これらの研究者は関心を集中したが、何の不審な点をも、そこに見出さなかったという。古田氏は、現存者中現碑に接した末松保和・梅原末治の諸氏を訪れて直接これをたしかめていられる。

注目すべき点は、研究方法の差異である。今西氏たちは、現碑を直接詳細に調査している。これに対し李氏は拓本、ふちどり本や写真の比較という間接の方法をとっている。金石文の研究方法として前者が決定的にまさっていることはいうまでもない。しかし李氏は多くの拓本、ふちどり本や写真類をあげ、それらの比較をおこない、実証的性格をもそなえているので人々に注目されたのであろう。古田氏は東京・京都にかけて、おびただしい数の拓本、ふちどり本、写真類を集め、それらについて一つ一つ検証を重ねていかれた。しかしそこにあらわれた文字の異同が「拓工の仕業」でなく、「イデオロギー的加工」によるという客観的証拠はついに発見することができなかったのである。

李氏は酒匂大尉自身の証言は発見しえなかったが、広開土王陵碑文の解説作業が参謀本部で行われたことをはっきりつかむことができたのべている。しかも、「参謀本部で解説作業の行われたことは世に知らされなかった。……こうしたことは、参謀本部からきびしい緘口令が出ていたからだとしか考えられない。」と云う。これに対して古田氏は、

ここで李の操作している論理はつぎのようだ。参謀本部は学者たちを動員して解説作業を行なった。その証拠は何もない。しかし、証拠のないことこそ、参謀本部がいかに「きびしい緘口令」をしいていたか、ということの、何よりの証拠である。

これは論理の、いわば「永久自転」である。要は、李自身が「そう思えば、もはやそれで十分であり、格別に、「史料上の証拠」など必要としないのである。

と手きびしい非難を加えられた。

その後、韓国史学界でも、李説に対して、核心的な問題の解決における資料の補完を行なう必要があるとのべられたり、井上光貞氏が「王碑のナゾ」(毎日新聞 一九七三年五月九日付)で、李氏が「危ないとする文字」は字数も少く記事の大部分の文字とその文脈はオリジナル通りということになると述べ、李説は「けつきよく空中に築いた楼閣だとおもう」とした。李氏は字数の問題ではないと承服できない様子である。

一九八二年の七月・八月は、社会科学教科書の現代史の記述について、中国・韓国から異議がとなえられ、テレビのニュースは連日その報道でにぎわった。しかし中国・韓国からすれば事は現代史ばかりではないのであり、各時代について問題がのこされているであろう。そういうところから、今までは違った観点から新しい研究がすすめられ、学問がより以上に進歩することは大変喜ばしいことである。しかし、中国・韓国からの問題提起が、かつての日本の軍国主義と同じような偏狭なものではなく、純粹に学問的な立場にたつて公正な論議を展開するものであってほしいことは勿論であり、卒業生、学生諸君もこういう問題に対処できるようにあってほしいと思う。好太王碑文に関する問題点を知るためにも、古田武彦、佐伯有清両氏の前掲著書を一読してほしいと思ひ、この文をしたためた次第である。

(専任・日本文化史)